

仏陀の心（6）

1. 仏陀の真であるそこでの普通は、理解の質を高めるべく実践の域へと自らを変化に乗せると、それがそう簡単ではないことを経験し、どれ程心ある原因の風景からこれまでが遠ざかっていたかを知ることになる。それが極端に難しいものとなる時、その気もなく嘘の世界を本当として、狡く生きていた自分の姿を見る。

彼の普通は、人としての、生命本来の普通。その実践の感触がどんなであれ、淡々とすべきことをこなし、然るべき反応を受容しつつ、歩み続ける。それは、人間の、生きる基本となる。

「仏陀の心」を知る経験を、責任とする。すると、新たな知る（知識）との出会いも、責任ある原因の反映となり、ムリなく、自然に、その質は高まる。創り出される現実も、普通に変わり出す。

その普通が脇に置かれる時、その人を通して、時は曇り出す。そこでは、知っても、それに責任を覚えなくてもいい知識が溢れ、責任が知ることとなって、知ることを通して変わり得る（変わるべき）現実への責任感覚は無しとなる。

その様は、まさに、この国の、これまでの仏教（宗教）の姿。責任ある原因が育たないその世界は、形を生み出す心（原因）に無責任でいられる人の満足の道具となり、仏陀の世界

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

を、好き勝手に弄ぶ。知ることだけを喜び、次なる原因を動かさずに変化(責任)を避ける時、そこから、嘘の原因は動き出す。

2. 心の世界において、知ることから、変わることは無い。その前に、すべきこと。それは、知らなくてもいいことから離れている(いられる)ということ。

心に正直でいる人は、そのことを学ぶ次元を必要とせず、心のままに、想いを形にする。そうではない人は、そのことを学んでもそうにはなれない時を経て、想いの不確かさ、心の未熟さを体験的に知ることから、原因の質の成長の機会を創り出す。

両者にとっての‘知る’は、大きく違う。前者は、知ることが、そのまま生きる原因に溶ける。後者は、無自覚に知らなくてもいい時を重ねていたことを顕にする。人、物、関係性、場所 etc.。心に正直でいることが難しい人は、そのどれも、知らなくてもいい(縁しなくてもいい)ことばかりである。

嫌なことや敬遠したい世界への抵抗・反発は、それ自体が、知らなくてもいいことを度々経験していることの証となる。その上での知識は、それまでの原因を引き連れたままの知識となり、知らなくてもいい時を更に作り出す。

それらの世界とは縁遠く、嫌悪や敬遠の感情を持つこともなくそこから自由でいる人は、その意識もなく、知らなくてもいいことから離れている。知識とは、自分に引き寄せられるよ

通は、普通に生命世界の主導権を握り、その間の歪な普通のその原因も、心ある人の本来(本体)によって、余裕で浄化されていく。

「歴史の芯」の中で厳しく辛い時を生きた心ある素朴な人たちの、その切なる想いは、現代に生きる仏陀と道元二人のその生命の意思をこの無有日記の原因と融合させ、「仏陀の心」を、ここに生み出す。そのことで、時代は安心し、時代の本質のその原因となる本体の次元も、それまでとは異なる風を吹かせる。「仏陀の心」は、みんなの心となり、水や空気のように、全ての生命を生かし、時を癒し続ける。本体は、人としての身体時間を、かつてのように、地球感覚のそれにする。

「仏陀の心」は、この 10 章を以て、次なる時代へのその確かな原因づくりの役とする。自由に、思うままに活用して欲しい。内容を知り、実践し、様々な反応を通して、自らの原因を成長させる。それだけでも、地球自然界は安心し、それだからこそ、人としてここに生きている意味がある。この時にここに居ることを大いに楽しみ、みんなで、普通自然体で、生命を生きる。これまでの時代に感謝し、これからの時代を祝福する。
(by 無有 12/28 2017)

うにして自然と縁し、さらりとそれは、次なる原因のそれとなる。

前者の知るは、頭であり、感情である。心の成長は、そのことを知り、そうではない時の原因の選択無しでは為されない。後者の知るは、心であり、感性である。そのままそれは、心の成長の材料となる。

仏陀の真実は、実に素朴で、普通。知ることのその原因となる風景を、心に正直に、人間らしく生きる。

3. 生きることに真剣でいると、人のためになる生き方が普通となるので、そうではない原因となる現実への反応も、自然なものとなる。そして、それを未来が喜ぶ原因のそれへと変える仕事を喜んで行う。その時、そう考えるまでもなく、健康でいることが大切にされ、平和な想いでいることもあたり前となる。ふと気づけば、不健全な出来事は姿を失くし、不安や心配事の話しも、皆が忘れる。生きることが楽しくて、生かし合うことが嬉しくて、ただそのまま、喜びの中に居る。

人のために生きる普通(の原因)に抵抗する人は、流れない感情を形に、重たい結果を残す。過去を引きずり、形式に頼り、未来への原因を忘れる。その時、頭は忙しく、感情は四方に向き、身勝手な健康と平和への欲求で、周囲を不穏にする。生きることへの不平・不満を募らせ、ご利益心を強め、不安の裏返しの安心を外に求め続ける。

生きることに真剣でいると、健康と平和を普通に生きられ

るだけ生き、そして迎える死の時を経て次へ行くという、自然な感覚が普通となる。そうではないと、無くてもいいこと(不安、争い、病気)に付き合うことが生きることとなり、次に行く感覚も抱けず、死後の世界に住み処を築く。

生きる原因は、いつ、どんな時も、誰にとっても、健康と平和、友愛と調和、そして、余裕と安心である。その外に、仏教は無い。不安や争い事を前提とする宗教(教え)が、人間世界にあるはずが無い。

4. 真にこだわる思考は、要らない。ただ、嘘を外せばいい。自らの中に、裏表を演じる自分がいれば、その姿を無くすこと。不都合な現実を見て見ぬ振りをする自分がいれば、その嘘の自分を返上すること。そこから、真は生まれ、そこに、真は近寄ろうとする。

嘘が外れれば、そこには、正邪も善悪も無い、ありのままの真実が在る(残る)。それは、限り無く中庸でいる、生命本来の意思。人が人として生きる上での、真の普通の原因。初めからずっとそこに在り、それを見えなくさせて(させられて)しまっていたことに、人は気づく。

正しさも、確かさも、嘘が外れないままの世界には存在しない。自らの中に、二者択一的思考による(期間限定の)価値観があれば、それは、狭い経験枠内でのみ通用する、嘘の形。そのままでは、正しさは、時を超えることはない。考えること自体に意味を見出す思考に頭を使えば、考えるまでもなく

7. 不穏な世のその原因となる世界を、人間の無意識とその本性の遺伝子を中心に段階的に掘り下げ、そこで浮き上がる浄化すべき対象となる存在を多次元的に処理し、そして辿り着いた、これまでの本体の姿を消し得る、「歴史の芯」29章。そのことで、新たな息吹を生じさせた「仏陀の心」は、新しい本体の誕生を支え、その全てを自らと一体化させつつ、生命本来の真の普通を創り出す。生命を生きる人間として要らないものの、その原因を本格的に処理し得る時を楽しむ、新しい本体。「歴史の芯(29)」から、「仏陀の心(10)」へ。新たな時のその原因の始まりは、どこまでもさりげない。

本体を主に本来を生きる普通は、本人の在り様とその心の性質の成長を、どこまでも優しく見守り、支え続ける。その過程では、未消化の感情(経験)の記憶をも癒し、その原因となっていた存在を通る、ある不穏な性質の本体の様にも対応する。それは、本人が本体であるから容易となること。危うさを備える本体をそのままに、そうではない本人を上手く生きようとする人のその不自然さも、通用しなくなる。「仏陀の心」は、生命本来を普通に生きる人の、その本体の仕事を、いつでも、どこでも応援する。

8. 本体は、そのままその質を安定させ、本人の人間時間に連れ添う。いつしか、「本体の彼(彼女)」も、「本体の私」も、その違いが無くなる時を迎え、次の生でも、その次の生でも、人は、ありのままに生命を生きる。三千年の時を経て、仏陀の普

き連れなくていられる新たな本体は、右脳に溜まったままの負の原因を、多次元的に浄化する道を探る。細胞たちの悲しみのその根本となる原因である、本体をオカシクさせられていた時の、本人の経験。本体は、「仏陀の心」に‘その時’を委ね、喜んで、そのための仕事を担おうとする。

6.人は、心であり(本体と本人がひとつであった時の記憶を心とし)、心に寄り添う本体がそのまま本人となる身体時間を、人間は生きる。その普通から、手に取るように見え出す、そのことへの抵抗と怖れ。それが、仏陀の普通を退けた、平安・鎌倉期を中心とする仏教(教え)であり、道元の人間本来を恐れた、嘘の神々の世界である。そのために、やむ無く引き受け、蓄積させることになる、無くてもいい経験の中での、痛みと苦しみ。生まれ変わった本体は、心を通して、その原因深くに入っていく。辛く切ない時を彼も経験して来ているので、それを、何より嬉しい。

何度も触れ、そのことに意識を向けた、「私の本体」の時を経て、ここで、「本体の私」を感じてみる。それだけで、他は何も要らない。これまでの体験的知識を活かし、様々にそれを感じ、その世界(次元)に居る感覚を普通としてみる。現代の道元を通して経験し得る、永いこと忘れていた、生命としての普通。仏陀の原因(本体)もそこに居て、この時を歓迎する。そこから始まる、人間の、人間らしい人間時間を、普通に生きる。

変え得る事の原因を忘れ、在るべき姿の確かさを歪めてしまうことになる。確かさは、次に繋がる、力強い原因の連なりである。

仏陀の想いが、自分の心のフィルターを通り抜けたら、どんな言葉が生まれ、どんな発想が湧くか?そこに、嘘は存在しない。

5.仏教が伝わった後も、この国は、それまでと同じ、命(人生)の奪い合いの歴史を延々と続けていたことを考えれば、今に至る仏教関わりの知識全てを白紙にするぐらいでないと、かつての負(闇)の原因をそのままに嘘の人生を生き、その嘘を未来に流して(繋いで)しまうことになる。仏陀は、争わなくてもいい原因(の生き方)を伝えるために、自ら、それを実践した人。その彼の普通が、そのまま普通に繋がり、成長し得ていれば、人は、仏教を通して、共に生かし合い、支え合う人生しか知らない。仏陀の普通(真)を歪めて、彼を利用する非情な力は、人間同士が潰し合う(殺し合う)戦の援護にまで、神仏を仕立て上げる。

唯一仏陀の真意(となる世界)を、その原因のところから表現し、繋ぎ続けた、道元。彼の存在が遠いところにある人は、思考(頭)から始まる形ばかりの仏教に汚染されている現れ。仏陀の世界に近づこうとすると、その案内役のようにして、彼の想い(原因)を心の風景に通してくれる、道元。心が主人公でいる生き方を、人は捨てずに済んだこと。仏陀の真が再生

されたこと。彼が、この国の人間として繰り返し生を経験したことが、この今の「仏陀の心」に繋がる。思考型の(知識としての)仏教からあたり前に自由になる時、道元は、より仏陀の心を人の心に通し(流し)出す。

6. 求めなくても手にするものは、自らの分に見合った、自分らしさ。それが隔たりや優越とは無縁なものであれば、生きることが、そのまま人間本来のそれとなり、何をしても、生かし合う普通を元気にする。そこで手にするものは、生きる力の原因。それで動き出すものは、人の生きる原因。求めなければ、手にするものはすでに、その人の人間らしさを支える仕事の中に居る。

求めることも、求めさせることもない自然な風景では、それ自体が生命世界の原因となって、みんなにとっての新たな原因の時を生み出していく。そして引き寄せられる(創り出される)、その自然な営みにとってのもの。そこには、必要なものは何でもあり、時が変わっても、その時々で必要なものは何でもある。平和も健康も、そうではない原因を人は知らないから(持たないから)、手にするものは皆、平和と健康をその気もなく支えるものになる。

その仏陀の普通に照らして、これまでの時を観る時、この「仏陀の心」が、未来に向けて、どれ程の(原因の)仕事をするかが分かる。そこに在る、時代が望む、全体からなる必要性と、無くてもいい原因への浄化。求めているは、手にするもの

る本人は、真に生きることを普通感覚とし、そうであることの他は経験の外側となる。それは、生きる原因が仏陀であり、道元であるということ。そこでの普通は、その普通だけが在る。

それを、生命本来と言う。生命の源である本体が本人(身体)を生き、その二つをひとつに、心を生きるということ。人間は、その時から本当の人生を生きることになり、かつてそうであった時の自分の意思を、心に重ねる。本体発の人間時間が、人としての真の人生である。

5. 本体と一緒に(同一として)本人を生きる本来の在り様を普通とする時、本人は、そのまま本体の意思表示の姿であるから、何をするにしても、本体の居る多次元的原因と繋がり得るといふ、それまで一度も経験することのなかった生命としての本人を、人は自然体で生きることになる。求め、手にする次元ではないそれは、ただそうである自分がそこに居るだけで為される、何でもない普通体験。どんな自分がそれをするかという、事の手前のその原因がすでに本来であれば、本体は、本人の心を中心に原因を重ね(繋ぎ)、本人と共に、その心となる。心は、さりげなく形となり、形は、心ある風景の原因となる。本体の意思は、その全ての原因に乗る。

そんな時を経て、本体は、本人の感性に合わせて、興味深いことをしようとする。それは、かつての経験の性質を知る本体だからこそ進めようとする、その記憶の浄化。それまでを引

が喜ぶ原因を限り無く高めた心は、この「仏陀の心」をフィルターに、生命本来の足枷となる(心の成長に連れ添えない)これまでの本体を置き去りにし、身体表現のその原因とキレイに重なる新たな本体を創り出す。本体は、歴史上初めて、心と同一となり、その人らしさの原因のそれとなる。

本体は、本人となり、本人のその経験の性質は、そのまま次なる時のその原因としての本体となる。裏表を知らない心は、自由にその想いを広げ、心の無さとは無縁の思考は、どこまでも生命としてのそれになる。心のままに、心を生きることが普通となり、誰も、心ある自分を意識することがなくなる。その全てが、本体の意思。そのどれもが、本人の普通。無意識の意思も、感情の原因も、そうである時を忘れて心と遊び、そのままそれが言葉になり、行為になるその素朴な経験に、本体は笑顔になる。主人公は、心。そこに、本体も本人も居る。

4. 仏陀の普通が、その原因のところからその人の心へと流れ出し、形になる時、それまでの思考の枠は外れ、心は感覚的理解(経験)の限界を余裕で超える。そして、ふと訪れる、真の普通。それは、自分にとっての、自分の本体ではなく、本体にとっての、本体の自分という認識。そしてそれが本来の姿であり、生の基本であるという理解。期間限定の価値観も思考による現実も、初めからどこにも無いその本体の次元から始まると、一瞬にして、自らの存在が、そのまま平和となり、友愛と調和となる。それ以外は何も無い。本体とひとつにな

は、自分にはその原因の無い、形ばかりの(連繋の意思を持たない)平和と健康。求めず、探さず、ただ平和と健康の原因でいる。その時、手にするものは、そのまま、次へと流れ、外へと伝わっていく。

7. 人は、人と居て、行動を共にし、経験を重ね合う。人は、自分には無い役を担う異性と居て、一緒に過ごし、共に経験を創り出す。人は、子を経て大人(親)となり、年老いて身体を離れるまで、人と居て、人を生きる。そしてまた子となり、親となって、新たな時を経験し、共に経験を創る。

その、人としての時が、自然に流れ行くことを、愛情と言う。そこで、人と人が交わすこと、高め合うことその全ての人としての営みを、愛し合うと言う。喜びは、どこにでも在り、優しさは、誰もが普通とする。分け合い、支え合うこと以外の原因を持たない人々の空間は、愛情だけがあり、愛し合う時がある。

その普通が、普通ではない時、人は、その修復へと、自動制御のようにして、自らの原因をそれへと向ける。そこに異性間関わりの負の原因があれば、その異常な普通世界との融合(絡み)を離れ、次に残してはならないそれを、形無き原因のところから浄化する。そして、人と人が居る空間を、生命としての本来のそれへと変えていく。

異性間のその在り様は、人が共に生きる上での基本形のそれであるゆえ、そこでの歪みが生じる原因も、それがそのままである原因も、人は放っては置けない。そのことが乱れに

乱れた、平安・鎌倉期。仏陀と道元は、協力して、人の居る空間(人の生きる道)のその原因を修復する。事の異様さと、人の意識の異常さから離れ、その負の原因全てから自由になって、望むべく時を創り続ける。

8. 共に居る相手が、親であれ、子であれ、同性であれ異性であれ、その空間は、そこに居る人にとって、次へと繋がり、次へと広がり展開する、貴い原因の時である。それは、人としての大切な原因でもあるから、そこには、強者や弱者、上位や下位といった、滞り(結果)から始まる価値感情は存在しない。誰のためでもない、みんなのための発想を普通とする、人と人。何かのためではない、みんなにとっての何かが自然と生み出される、人の居る空間。愛情は、そこに居る誰をも包み込み、優しさも思いやりも、誰もその意味を知らない。

親と子でも、男性と女性でも、そして友と友とでも、互いは、互いを、あたり前に尊重する。そうではない経験の原因は、どこにも無いから、そこに別な人が加わっても、その基本は変わらない。人は、心のままに、心を形にするから、自分には無い経験を持つどんな相手からも、自然に学び、それを活かす。親は、子から教えられ、子は、親から力を貰う。男性は、女性に活かされ、女性は、男性によって、心を強くする。

仏陀の普通のその原因の中に在り続けるそれらの在り様は、道元によって引き継がれ、今に至る。向かう世界ではない、生きる基本としての、人間経験の大切な要素(前提)。始まり

2. 様々な場面で登場させ、その時々を担わせつつ描写してきた、‘本体’という世界。仏陀の本体に触れ、本体の性質とその背景にも、経験から自由でいる思考を材料に、それへの感覚的理解を促してみた。本体と本人、無意識の意思と意識し得る思考、そして感情の原因と、結果としての感情。元々同一であったそれらは、そうではなくなる不自然な原因の経験を経て切り離され、人としての身体時間は、その自覚もなく不自由さを常としてしまう。

「歴史の芯」は、それまでの本体の姿を消し、無有日記の原因との密な融合を基に新たな本体を生み出すという、人間が経験し得るそのシンプルな真実の極みとなるところ(次元)にまで辿り着く。もちろんその基本は、「歴史の芯」と「仏陀の心」の、そこに在る普通の表現。普通でいることで、その普通の質を成長させる経験は、そうではない性質の原因を確実に浮き上がらせ、戻ることのない確かな変化を、その人の心に馴染ませる。心は、変化そのもの。その心は、本体の新たな経験を、その力強い原因で支え続ける。

3. 自分のものであって、自分らしさのそれではないそれまでの本体は、その存在意義を持たない程の新たな時を、この「仏陀の心」で経験する。そして、歴史的負の連鎖のその原因への浄化に自らも(無有日記を通して)参加し得たことで、本体は、無くてもよかった経験(の記憶)の原因と一緒に大きくその質を変え得る意思を、心に伝える。過去が癒され、未来

仏陀の心（10）

1.「仏陀の心」を通して、人間本来の基本形が安定し、そのさりげない実践を通して、そうではなかったこれまでの原因が癒され、ここに溶けだすという経験は、その意識もなく変化・成長させていた普通の質が、その原因のところから、自動制御のようにして淡々と生命の仕事をし続けていることを意味する。その場所を通ることで、人は、仏陀の普通のその原因とより活動的に融合することになり、自らの原因は、新たな次元のそれへとその質を進化させ得る時を迎える。それは、「仏陀の心」のその意思表示の共同作業と言える。この時代にそれが為され得るといふ、奇跡という名のその普通は、現代の道元にとって、とても心強い。

その時が来たことで、この時なのだとして初めてそれを認識することになる、どこにも無かった、無の中の有。どんなものにも意思が在るといふその事実の奥深くで、この今に繋がる原因を絶え間なく回転させ、創造の意思を放ち続けた、全てであるひとつのその一つの素顔。これまでの人間経験のどこにも無く、思考の次元のどこを探しても見つからないこの時の普通体験は、その原因を、さらりとその普通の中に溶かす。全ては、自然現象。普通は、そのまま変化に乗り、成長・進化を普通とする。

が本来であれば、そのままそれが本来の人生となり、何があっても、どんな時でも、それは本能的に守られ続ける。そこから広がり出す、仏心(真の普通)の原因。誰もがただそのままにいられる時のためのその原因として、「仏陀の心」は仕事をし続ける。ここでの普通は、次なる時を、そのまま普通にしていく。(by 無有 11/17 2017)

仏陀の心（7）

1. 安心には、理由は無く、不安には、理由が有る。安心に理由が有るとすれば、それは、不安に蓋をした、不安の裏返しの安心。本物ではない。理由もなく不安になるのは、自覚できない程その理由が深くに沈み、対応し切れなくなっているから。理由の無い不安は存在しない。

人は、様々に、安心と不安を経験する。そこでは、多くが、理由の有る安心と、理由の分からない不安。そのどれも、いつのまにか蓄積させた不安が主導権を持つ。安心は、安心ではなくなり、不安は不安のままである。

理由の無い安心は、不安が不安でなくなる時の、その原因となる。安心が不安の裏返しのそれ(理由の有る安心)であるとすれば、無自覚の不安のその原因と向き合う時を迎え入れる。そのためにも、安心でも不安でもない時を淡々と過ごし、浮き上がる不安をそのままに、安心の通り道を創る。考える時間を外し、向かおうとする場所を離れ、思考を自由にさせる。安心は、求めなければ、理由の無い安心となり、不安は、それをどうにかしようとしなければ、その原因の元の不安が、動き出す。

安心は、そうとは分からないくらいさりげない。不安は、そうとは分からずに、姿を消していくもの。どちらでもない中で、その安心と共に、不安と遊ぶ。その時、不安は不安のままでは

意識のところに蓄積する。良いも悪いもなく、被害者も加害者もなくいられる「仏陀の心」に居て、その無くてもいいものを浮き上がらせる。見られたくない自分は、真っ先に向き合う自分。知られたくない(隠したい)自分は、決して放っては置けない自分。心の性質は、あらゆることに影響を及ぼす。その負の影響力を潜めたまま人間本来を生きようとすれば、全てが嘘になる。

この時代、「仏陀の心」を自らと重ねることが難しい時間ほど、要らないものはない。それは、変化の原因そのもの。心の成長とその具現化の進化を見守る、全てであるひとつの意思。この時の経験をこれからの人生に溶かし、自らが、普通という名の新たな歴史の創り手となる。普通は、それだけで平和の要素を備え、その質の高まりとともに、健全・健康をあたり前とする。「仏陀の心」との出会いは、仏陀の意思である、彼の普通との融合。その普通を、どこまでも普通に、この今の、未来への繋ぎ手となる。時は、「仏陀の心」が一歳となる、2018年へ。共に歩み、共に生きる。(by 無有 12/15 2017)

陀の心」を通らずして、人は本来を普通に生きることは出来ないことを知る。

本来という原因から外れず、それを始まりとする生を普通に生きる自分である時、本来でいる証のような感覚的理解が自然と生じ出す。その代表例が、LED 照明への自然な違和感である。本来でいる感覚は、健全さを普通に、そこに在る無生命化の意思を感じ取る。生命が生命でいられなくなるその原因は、仏陀の普通を尽く崩し、道元の意味を無きものにする程の負の力を持つ。人間が、人間としての責任を形とする時、そこに、LED 照明は存在しない。

LED 照明がそこに在れば、全粒穀物食は、力を無くす。そして、人は、心ある自分を取り戻せなくなる。自然界に生きる生命たちの望みは、普通に生きること。その普通が、LED によって壊れていくことに、彼らは、ただただ耐え続ける。本来の原因から生き直しをし(再スタートを切り)、生命たちを安心させる。本来でいる原因を成長させ得る「仏陀の心」は、そうではない原因を包み込み、自然界の望みに応える。

8. 人として望むべく在り様の基本は、人間本来の、自然で普通の姿であるのだが、誰もが普通にそうであり得るそのことが難しいと感じる時、この「仏陀の心」に繰り返し触れ、その世界を自らとしてみる。

そうにはなれない理由には、それだけの原因があり、その原因は、その気もなく争いや不調を生み出す材料として、無

なくなり、広がる安心の中に溶けていく。

2. 人は、生きることが、その自覚もなく充実している時、暇であり、不安も無い。その意識もなく、その時々ですべきことをし、歩むべき道を歩む。思考はいつも自由で、心の自由に、それは連れ添う。訪れる風景は、要らないものが自然に砕かれ、次なる風景になるべく力を付けて、癒される。そんな普通を、日々連ねる。暇だから、(引き寄せられる)どんな時間も余裕で大切に出来、不安が無いから、思い悔やむ経験も知らない。ただ生きることに真剣でいる自分を、あたり前に生きている。

そうである境地になるべく行の類があるとすれば、それは、頭を忙しく、不安と闘うことになり、そこでの(不安の)原因は皆、自分らしく生きることを遠ざける。その理由を覗いてみれば、生きることへの不真面目さが見え出す。暇で、安心の中に居る人は、生きることに真剣だから、闘う忙しさ(という時間の浪費)とは無縁である。

3. 決められたことに従い、言われる通りのことをしていると、自分で決めることも、素朴に思うことを言葉にすることも難しくなる。与えられるものに満足し、求められることに応えていると、人に何を与え、求めていいかも分からなくなる。

決められたことに従うこと自体、そこには何の意味も無く、意味があることが決められていることで、その大切さを人は理解する。しかし、意味あることは、大抵、人が決められるとこ

ろには無い。

求められることに応えるそのことに価値は無く、価値のあることが求められることで、人はその重要さを認識する。しかし、価値のあることは、大抵、人が人に求める次元には無い。

与えられることを良しとし、言われた通りのことをすることも、中身は同じ。そのことから始まることはあっても、そうであろうとすることが意義を持つことはない。

人は、いつの時も、体験的に知ること、体験的に手にすることを普通とする生き方を、身体表現の基本とする。そこに決められたことが在るとすれば、そのことを守り、支え、応援するものだけが在り、そこで求められるものが在るとすれば、そのどれもが、そのことに協力し、共に活かし合うものとなる。あとは、ただ体験するだけ。そこで手にし、生み出されるものは、全て、人間本来の自然な在り様の原因(材料)となる。

人間には、教えられなくても、分かっていることが多くある。他への優しさ、互いの尊重、生きることの喜び、繋ぐ責任 etc.。それらのことに、決まり事は決して当てはまらず、それらを強いられる経験も要らない。人として大切な体験は、人との間で自然と為され、その意味も、その価値も知らずに、それらをあたり前に、人は表現する。人生は、生きる喜びではなく、生きる喜びが形になったのが、人生である。

4. 安心と余裕の原因ではなく、不安と焦りのそれと結び付く知識に埋もれる現代社会。そのため、人は、要らない時間を

得なかった、否定感情潰けの白米文化(白い小麦 etc.)。全粒穀物食を普通に、自然界との自然な融合を普通とする。共に生きる生命たちも、それを嬉しい。

食べたものがそのまま体の一部になる(食べたものによって体が作られる)、食物との関わり。栄養価のある(体の中で仕事をする)部分が除かれた食物を摂り続けても何でもない生活空間は、人間の思考全般を無生命化させ、その身体時間も、非生命的(非人間的)なものにする。それが普通であれば、それは異常の現れで、人が人として生きることは不可能となる。生きる上での活動のその基本材料となる、食物。人間本来は、食物本来を普通とする。

感性を健全にし、感覚を自然なものにしようとしても、細胞が喜ばない(辛くなる)食物の摂取を普通としていれば、それは(その脳では)、永遠に難しい。ただ難しいだけでなく、それは、生命を生きる人間として大切なことにも、無感覚・無関心な状態を潜在させてしまう。全粒穀物食には、生命を生かし、生命を繋ぐという、心ある責任と優しさがある。それは、仏陀の普通の基礎を安定させる、自然界の望みでもある。

7. 始まりが本来であれば、その原因はどこまでも望むべく姿となり、そのまま終わることなく本来でい続ける風景の連なりを創る。それがそうではない時、本来は、探し求める対象としてあり、何をしてもそれまでを浄化し得る原因になれないまま、本来から離れた風景を繰り返し生み出す。それを思う時、「仏

本。それが外されたまま生きることを良しとする人生を、人間は望めない。自然界の生命たちも、永いこと、待ちぼうけである。

仏陀への抵抗から始まった、この国の仏教。人の感情を操り、思考を忙しくさせるそれは、不安から始まり、不安で終わるもの。不安の裏返しの嘘の安心のために、無くてもいいはずの不安を経験させ(受容させ)、人の道を外す。これまでがそうであるからと、それをそのまま続けようとする(続けられる)僧であってはならない。安心から始まり、それが普通であるよう、不安の原因を浄化する。仏教本来の普通を、さりげなく、自然に表現する。

普通に生きるのを難しくさせられてしまう環境がそこに在れば、その原因に対処し、そうではないところへと事を進め、新たなその原因を力強くする。病気や争い事を抱える人たちが居れば、その根本となる原因を本来へと変え、そのまま健康で平和な暮らしを、そっと支える。差別や争い、病気や不健全の原因を潜ませる仏教(宗教)は、存在しない。

6. 自然界との調和ある生活空間を安定させることは、仏陀の心の、そのひとつの意思。そのための、この時代にすべき次の時代への連繋の原因は、食を人間本来とすること。この地球に住む生命たちは皆、体に取り込むものをそのまま生命活動の源とし、それは、共に育む調和と友愛のかけがえのない原因とする。歪であったこれまでの仏教に連れ添わざるを

多く費やし、無くてもいい現実につき合わされ、生かし合うのではなく、(命を)削り合う人生を生きる。そうである事実への理解も、対応も、人は知らない。

どの時も、自らの生命の意思を形に、柔軟に、真剣に生きた仏陀の、その想いは、3 千年前も今も同じである。この今、形になろうとする、現代仕様の彼の意思(原因)は、そのまま、無有日記に流れ、こうして文章になる。その原因の世界には、道元の(いくつもの人生での)経験からなる切なる想いも溶けているので、より明確に、二人の真意は、ここで形になる。

これまでの全てを基に進化し得た、(言葉に乗る然るべき原因という)沙と羅(淘ぎと連繋)の手法は、受け手次第で、その人自身の心が、どこまでも深く浄化され(癒され)得るものとなる。専門的理解も歴史的背景の把握も要せず、実に平易な言葉と表現となって誕生することになる、仏陀と道元の普通。それは、まさに、彼らの優しさであり、誰もが読めて、誰もが実践できる、仏教である。この時代に想いを繋ぎ得た、二人の喜びが伝わってくる。ここでの知識は皆、安心と余裕の原因と繋がっている。

5. 無有日記にも、その元となる形無き原因の意思があり、そこに、何を以てしても捉え切れない本体がある。その本体の性質をそのままに、そこでの原因は言葉になるのだが、それに対して、思考は使わず、それが思考を使う(通る)。心のままにが、あたり前になる。

思考を使わず、思考の本体(真の自分)を通すという姿を普通とすると、意識と無意識はひとつになり、心の性質は、常にオープンになる。感情の主導権はあたり前となり、重く、流れない原因を浄化するために、感情を活用する。そこに嘘の原因は無く、身を繕う不自然さも無い。自分に正直でいるという感覚も無く、心をそのままに、本来を生きる。

その姿を普通に生きる時、仏陀の本体と繋がる。彼自身がそうであったので、そのことで、彼の心が分かり出す。そして、普通の質は、進化する。思考を自由にさせ(自由な思考とは次元が異なる)、経験からも自由でいることは、その基本要素となる。

その状態は、ある意味、悟りという言葉で形容されてもいいと思う。元来、それは、人間の普通であるのだが、そうではない時を永く生きて来ている今を思えば、誰もが通るべき場所(感得)として、それは悟りと言える。その時、心に嘘を抱くことは出来なくなり、形(思考)から始まる生き方も無縁となる。成長し続ける中庸の世界に、あらゆる価値観は溶け、人としての望むべく在り様の、その原因を、人は生きる。そこに仏陀は居て、道元も寄り添う。思考は、心の脇役となって、心に使われる。

6. 心ある自分を生きるその原因は、形になる人の心のその原因を元気にする。そこでは、心ある原因でい続けることが普通となるので、考えるまでもなく感じられることが主導権を握

(ある種の)融合を普通とするから、何もかもが、本来の普通のひとつになる。仏陀の普通は、ただあたり前に普通でいるその姿を、当然のごとく普通としているだけ。そこに、平面上に収まる、対比され得る世界は無い。

仏陀の普通が、ある個の思惑で退けられる時、それは、単なる人生のムダづかいである。抵抗も拒否も、仏陀の心の、その余裕の中での普通。そうあるべき姿に触れたことで、そうではない姿を志したとしても、そこに在るのは、止まったままのきゆう屈な時間。それを包み込むその普通の中で、ただ癒されていただけ。本来の普通を嫌悪する姿勢は、生きることを普通としない(させない)人生で普通に生きようとするその未熟さを生きがいとする。仏陀の心は、そんなことも普通とする。

普通だけが在る、仏陀の心。道元の普通も、それと同じ。そこから離れても(離れようとしても)、彼らの永遠と変化からは出ることはない。全ての基であり、源である、普通。思考でそれに抵抗しても、感情でそれを拒否しても、それらは皆、彼らの(普通の中の)普通。普通は、ただ普通でいて、普通ではない世界は、そのどこにも無い。

5. 永いこと、生きることから外されてしまっていた、普通に生きること。そこに立ち返り、仏陀の普通を実践しつつ、心ある想いを重ね合う平和の時を、あたり前とする。それは、人間の仕事というより、人間であれば、当然普通に行う、生きる基

人間経験もそう。その全てから自由になれる(でいられる)この時の新たな経験は、未来を変え得る原因となり、過去のあらゆる性質の記憶をも浄化する。思考を自由にさせ得る時を通して自由になれるそれまでの経験は、思考による理解を不要とする時空を連ねることで、そこに在る(動きの無い)重石を外す。

自由な心は、かつての不自由な心を癒し、自由に使うことも出来なかったその頃の思考のその原因を、ここに招き、浄化する。意識も精神も、自由な心に支えられるそれらは、時を自由に超え、無くてもいい経験の記憶を包み込んで、かつての自分の涙顔を、笑顔にする。

経験から自由になるだけで、自由に動き出す心。「仏陀の心」に触れる時間は、そのことを普通に、普通に心に主導権を握らせる。そして心は、元気に心ある経験を創り、経験を残す次元を離れる。仏陀の普通との融合は、どんな時も、経験という名の次なる原因の中に溶ける。

4. 仏陀の心の世界と自らのそれが重なり合うような時を通して、ふと実感するのは、本来の普通には、その対象としてのそうではない歪な普通や異常さが、そのどこにも存在しないということ。それは、どこまでも普通、何をしても普通。絶えずその原因でい続けるその姿は、どこかへ向かうこともなく、求め、手にする目的もなく、その全てが普通となる。そうではない原因からなる世界も、そこに在れば、すでにそうである原因との

り、考えることもなく(頭を働かせずに)話をする。言葉を選ぶ思考は要らず、心が自由に言葉になる。それは、人が人である時の、心の時間。互いが居る場所は、育まれ続ける心の風景。

大切なことの話をする時に、考えることは何も無く、考えることもなく話をしている時のその(原因の)性質が、大切なこととなる。心ある柔らかな想いは、そのまま人へと伝わることを望んでいる。ふと湧き上がる言葉が、さりげなくそれに連れ添う。

そこに、考えながら話をする必要性があるとすれば、それは、考えるまでもなく分かることの質を成長させて来なかったこれまでの現れ。大切に思えることを考えて話すことで、それをごまかす。そして、考えなければ形に出来ない大切なことの、その重たい原因を溜め込んでいく。言葉から始まる正しさは、言葉だけの(言葉にすれば良しとなる)大切なことを、好きなだけ作り出す。

このことが、自然で、ごく普通の理解として大切にされる時、その人は、仏心(仏陀)となり、そのままで時を癒す存在となる。仏陀もそうであり、道元もそうであった、思考の力を不要とする、生きた言葉。それは、どんな時も、次なる時の原因でい続ける。

7. 人と争うことで手にする本当の満足(感情の本質)は、自分が勝つことではなく、相手が傷つき、苦しみながら倒れるこ

とであることを知るから、仏僧は、どこまでもその世界とは関わらず、平和の原因でい続ける。そして、争いの無い世を支える。

苦しい状況にいる人々のその存在を材料に、偽りの教えがはびこることを知るから、仏僧は、人々が苦しむその原因でもある、権力の世界とは当然のごとく無縁であり続ける。そして、その原因に働きかけ、苦しんでいる人たちを無くしていく。

その仏僧のあるべき姿が、奈良・平安期に在れば、その後の幾多の戦(争乱)は無かった。鎌倉期に、その本来へと立ち返る仏僧が多く居れば、この国の歴史は大きく違っていた。それが、この国の仏教の素顔である。

真の普通(仏心)は、言葉で知り、言葉で分かるものではないことを知るから、仏僧は、文字(文面)を語らず、心を言葉に、自らが真を実践する。そして、その原因を繋ぐ。彼らは、真実と繋がる本体(真の自分)を生き、仏陀を体現する。

8. 時代を超えて伝わり、繋がるべくものは、誰もが読める言葉で表されている。理解はそれぞれでも、触れる人の変化・成長に従い、そこに在る重要なことは、そのまま、次の時代へと続く。そこに書かれた平易な言葉は、言葉になる前から、未来が喜ぶ原因がその仕事をする。

普段使われない言葉が並び、特別な学びがなければ簡単には読めない(分からない)言葉や用語がそこに在ると、それは、繋がる未来を持たない。それが、権威ある文書(文章)と

実。感情も思考も、そこでは、心のかたち。

2. どちらでもあって、どちらでもない感覚は、そうであろうとする意識を寄せ付けず、ただ人が人としての生をさりげなく真剣に生きている時、そのまま、それになる。その中庸でいて、全体でいる自分が、その意識もなくそのままであれば、心に正直でいることも、正直になれるその心も、ひとつになって躍動する。それは、心の素顔。

心の世界に、感動は無く、感動する感情が、心ある普通を隔て、心を作り出す。感激・感銘の類もそう。心のままに生きることを怖れるから、安易に心を打たれ、感情も忙しくなる。心は、いつでも、心ある自分しか知らない。

精神性も人間性も、その在り様に頭を働かせれば、心は離れる。人として在るべき精神性も、望むべく人間性も、心は、それを普通とする。その普通を、人の心は望み、心は、その普通を本来の原因とする。心を、心として扱う次元に、心は無い。

仏陀の普通に、感動は要らない。彼の精神性に、思考を付き合わせることもない。心は、それを知るから、この時、仏陀の心と遊ぶ。共に、心を元気にする。

3. 経験から自由になる経験は、それまでとは異なる経験の原因が、過去ではなく未来と繋がることで、その力を発揮する。本体が知る、無意識(右脳)の中に在るこれまでの歴史での

仏陀の心（9）

1. 仏陀の普通世界を、ムリ無く、自然な感じで、自らの日常に馴染ませていくと、体験的に知るそこでの何気ない感触は、良いも悪いも無く、そのまま記憶(の中)に、記憶に残ることもなく染み込んで、溶け、流れるような時間と、滑らかに動き出す(空間の中に居る)感覚を通して、それら(の性質)は、望むべく変化のその大切な要素となって、さりげなく大きな仕事をしていることに気づかされる。

感情は、本来と全体にとってのその違和感としての反応のそれだけではなく、それが変化に乗り得るものであれば、感情は感性の中に溶け、そうでなければ、それを換え得る時の材料として、感性の中に収まる。感情の必要性に、(個の)感情は無い。

思考は、いつしか、頭で考えることではなく、心で感じることをそのまま通す役(場所)となり、対処や検討といった次元のものが縁遠くなる中、何かをしようともせずに、さりげなくすべきことをする(している)その原因を高める道具となる。考えているのは、思考は、ほんの少しも本来の力を出せない。

他を隔てる感情も、個のままの思考もそこには入り込めない、人間本来の普通。「仏陀の心」は、その本来をどこまでも細かく回転させ、それをどんなところにも流れさせて、時を癒す。それは、生命世界における人間にとっての、シンプルな真

して人の意識を引っ張る時、人の動きは止まり、繋ぐべきものも、力を失くす。人の生きる原因も、不自然になる。

そのための知識を必要としない平和は、その原因が力強い。言葉にするまでもなく自然に形になる健康的な営みは、そのまま、次なる時の、未来への原因と繋がる。そして、それらに連れ添う言葉は、まるで生きているかのように、優しく、純粹でいて、人の心の中で、繋がる時を癒しながら成長する。

大切にされるべきことは、普通にそれを大切にする原因がそのまま言葉になり、そうではない時を知ることもなく、人はその時々でそれを確認し合う。繋ぐべきことは、誰もが繋ぎ得る日常としての原因となり、ふとした想いに寄り添う言葉を通して、人は、その嬉しさを、それに(言葉に)乗せる。これらのことを、そのまま、ありのままに実践し、繋がる未来を元気にする。地球自然界が、優しさで溢れる。(by 無有 12/01 2017)

仏陀の心（8）

1. 力を持つ存在のために、不自由さに耐えつつ、言われるままに動き、辛さと苦しさを慢性化させる人たち。彼らとは対照的に、何もせずに欲しいものを手に入れ、食べたいものも好きなだけ食べ、楽でいられる人たち。

力を持つ存在と、その恩恵を得て楽に生きる、力ある側でいる人たちは、そうである以外の暮らしを知らず、そうではない経験を決して望まない。それゆえ、立場の弱い人が厳しく大変な生活をしていても、それを変えたいとは思わず、彼らの上に居て、何不自由なく生活できる自分たちの立場を、当然のこととして肯定する。そして、どうにもならない貧富の差や差別を普通とする歪な世が、それをどうにかしようとはしない力ある側の人たちによって、どこまでも維持されることになる。

その姿は、3 千年程前から、世界各地の、住環境に恵まれた地域で進められ、特に大河近くや地中海に面した場所では、人口が増えるに従い、その不自然さがあたり前になる。人間本来の感覚が普通に表現されていれば、誰も経験することは無かったであろう、人として低次の、二者択一的価値観を力とする、隔たりのある社会。人々は、心無い存在の歪な普通の元で、辛く、苦しい生活を送り、その異常をやむ無く（どうにも出来ずに）繋いでしまうという、余りに厳しい時を連ねて

気のような原因は無い。

思考で覆われた本当の自分のその性質が他者へと自由に伝わることになると、心(原因)の嘘は、一切通用しなくなる。それまでの知識や経験が意味を成さない感覚世界(環境)に身を置くと、大切にしてきた物や形は、そうではなくなる。そして、意思表示し始める、ありのままの自分の、その本質。それは、人間にとって、何より重要で、貴いもの。それがそのままであることを基に、人は、人としての生を生き、時を創造する。その普通世界が、普通に変化に乗り、空間を次へと繋げば、人は、争いの原因を生み出すことはない。苦しみも悲しみも、経験の外側となり、誰もが、生命としての人間を、自然体で生きる。

そのことを外して、人生を語ることは出来ない。なぜなら、人生は、この地球自然界に生きる一生命としての存在が、人間という身体を通して経験する、人としての地球時間。そこに、差別や優越、嫉妬や怖れがあるとすれば、そのままでは、人生ではなくなる。その原因の浄化無しに、人生と呼べる時を、人は生きることが出来ない。

改めて、「仏陀の心」を自分と重ねる。どこまでも中庸でいる生命本来の生き方を、自然界に、自信を持って差し出してみる。自らが、この地球発の、地球が喜ぶ普通人のひな型になる。(by 無有 12/07 2017)

動物たちの苦しみと痛み(の原因)を、そのまま取り込み、自分のもの出来る人たち。その地球自然界の望み(普通)を破壊するような行為と、その負の要素の原因は、キリスト教を通して多くの場所に伝わり、その地域の宗教の在り方にまで悪影響を及ぼす程になる。動物たちの苦しみを生み出さない、仏陀の普通世界は、人として要らないはずのものを備える存在たちによって拒否・否定され、そのままそれは、地球の悲しみとなる。彼らが、動物愛護や環境保全の言葉を発する時、そこに在る、全くそうではない暴力的な原因に、自然界の生命たちは、苦しみを覚える。

9. 宗教という言葉も、その概念も存在せず、そこから始まる生き方や事の捉え方も、どこにも無い状況があるとすれば(とは言っても、かつてはそれがあたり前だったが…)、そこに在る(残る)のは、水や空気のような、仏陀の普通である。その普通が、人から人へと伝わり、空間から空間へと流れ、繋がりに行く時、人は、生きる原因を、その意識もなく本来とし、無くてもいい経験を知らずに、あたり前の平和と健康の時を、共に育み、成長させる。

その様を、宗教という名で扱ってもいい。そうでなくてもいい。基本が否定感情とは無縁であれば、何をしても、それがどんな風でも、時は癒され、人は、健全さを普通とする。その世界から観た時、キリスト教の本当の姿が、面白い程に見える。そこに、生命を活かし、自然界を安心させる、水や空

いく。

2.2500年程前、釈迦牟尼(仏陀)が現れた時、それまでに固めに固められた非人間性(差別、支配欲)の原因を生きる力の源としていた、非道な人間たちのその本性は、そのことに大きく刺激される。触れなくてもいいはずの内なる不安との接点が、理由も分からず生じ出し、思考の働きも不安定になる。

彼の形無き原因の本質となる次元からは、人間らしさを欠いた存在たちのそれが余裕で観え、彼らには、彼(仏陀)の次元の様(性質)は、永遠に知り得ない。その全く感じることも出来ない原因(本体)を持つ存在が、身体を持ったわけである。遥か上空から自分たちの居る場所を突き抜けて地上に現れたような、その驚きの経験の事実は、彼らに、恐怖心を抱かせる。

その恐さは、自分たちのこれまでの普通が、その内側から崩れてしまうことへの怯え。原因を持たない結果は存在しないという真実の中に、仏陀の限り無く中庸でいる原因が入り込むことで、永く維持してきた、重く、動きの無い原因(の蓄積)が浄化されてしまうことへの脅威。世を支配し、心無い現実の受容を人々に強いてきた存在たちは、仏陀の持つ普通とその原因が自分たちの世界には入り込まないよう、あらゆる手立てを講じる。それは、権力支配を普通とする各地で、申し合わせたように始まり、様々な動きが生じることになる。その

西欧版が、キリスト教である。

3. 異様な原因(本体)で繋がる、危うい本性の遺伝子を備える存在たちは、自分たちの心の無さが、仏陀の原因によって顕になり、それが隠しようのない不合理な原因となって不穏な状況を引き寄せてしまうその現実を避けるためには、人々の目に、心ある姿を印象付けることが何より重要であると考ええる。そのために取った選択が、形あるところでの、思考による心ある行為である。人々への対処にも、柔軟さと寛容さを巧く組み入れ、以前よりも楽という感触を人に抱かせて、彼らの、(置かれた環境への)積極的受容を演出する。形あるところで、人の心に安心の時を経験させ、それを心ある姿として感じさせて、人としての基本となる心の意思世界の質を、自分たちの都合の良いものへと変えていく。

言葉で扱うことの出来ない心の世界を、上手く言葉で処理し、真実としてそれを人々の思考にすり込み、一般化できた経験は、そのことを人との共通項に、支配・権勢の土台となるその強力な要素を生み出していく。心ある振りど、嘘の優しさを馴染ませつつ狡賢さを磨く、力のある存在たちは、実質、それまでと同じく支配体制が維持されていることに安堵し、それに加えて、人々の中の不平や抵抗が弱まっていることにも味をしめ、更なる企てを試みる。

彼らは、イエスという存在を作り出し、心ある存在の代表として、それを人々に崇めさせ、心ある原因を不要とする、作り

性質は、そこにどんなものがあったとしても、そこを通り抜けてそれを包み込み、癒す、自然界の根源的な意思表示をあたり前とする。そんなだから、嘘の原因を生(土台)とする(結果を生きる)存在たちは、それに抵抗する余り、原因の性質無視の観念的思考を形(宗教)にして、自らの本質(本性)を顕にしてしまう。道元と同じ時を経験しながら、仏陀(真の普通)を退けつつ、キリスト教に熱くなるこの国のある層の人たちは、その東洋版の典型と言える。

8. この地球で共に生きる動物たちを食べることなど、余程のことが無ければ考えることもなかった、自然界に生かされ、自然に生きる人間。それは、キリスト教という、心より思考を優先させる(心が思考で扱われる)教えの、その元となる原因の風景で始まり、そのことで次第に脳(右脳)を不自然にする人たちの間で、それは日常化する。動物の肉の摂取は、それを普通とすると、それまでには無かった様々な否定感情(嫉妬、差別、怖れ etc.)の土壌が脳に植え付けられ、その気もなく、攻撃的で自己本位な生き方をするようになる。(人間の心身は、元々それを良しとしないわけだから、当然のことなのだが…)そして、時代環境が許せば、支配・所有欲を狡賢く具体化させ、そうでなければ、巧みな偽善・偽装で、世の潮流を自分たちのものにする。その非人間的な感情(脳)は、形無き心の性質を無視できるキリスト教の、その負の土台をしっかりと支え続ける。

7.いつの世も、そこに力を持つ普通ではない存在が居れば、差別も争いも無い本来の普通は非常識とされ、弱い立場の人たちは、そのことに抗えずにただ力に従い、身を守るために、そうである常識(歪な普通、嘘)を正しさとして生きる。何世代にも渡ってそれが続けられると、世は、完全に自浄力を無くし、それまでの嘘に頼り、利する立場にいる人と、そうではない人との間では、無くてもいいはずの格差が生まれ、健康状態や、平和や安定への意識にまで、違いが出る。

困った人の存在を前提とするというのは、病気や争い事(衝突)が、それによって生まれやすくなるということ。医療技術の発展も、武器製造も、その嘘の原因から始まったものであることが、容易に理解できる。力を持つ側から生まれたキリスト教は、人間が人間らしく生きる上で無くてもいいものを作るのが上手である。

仏陀の普通は、人としての本来であるので、そこに、嘘の原因は無い。嘘の原因が無いというのは、形を生み出す形無き原因が、生命としての、ありのままの自然な姿であるということ。本当か嘘かという思考型の価値観も無く、ただその心ある原因の意思のまま、時空と戯れるように生きているということ。それは、地球に生きる一生命としての淘ぎと連繫(沙と羅)の仕事、さりげなく担う。

そのどこにも向かう場所の無い、仏陀の普通には、そこに引き寄せられ、創り出されようとする、みんなの普通とその風景がある。自然界との自然な融合を基本とする彼の原因の

物の心の世界を真実とする。心を無くした人ほど何の違和感もなく実践できるその宗教を通して、権力者と、それに守られる心無い人たちは、仏陀の原因との融合が一切可能ではなくなる現実を完成させる。それが、現在のキリスト教のルーツとなる、その原因の風景である。

4.心ある原因をあたり前に生きるという、人としての普通を大切にしていると、二重三重に覆われた嘘の原因にも、段階的に容易に触れることが出来る。結果から始まらなければ、どんな原因も動き、形にとらわれなければ、形無きその本質がよく分かり出す。行為から始まり、過去に在り続ける言葉が大切にされる教えほど、心の無さを強くその原因としているものはない。それを知るというのは、人として、何でもない当然の経験である。

その原因の世界からキリスト教を観る時、かつての他地域への布教の危うさも、人は理解する。それは、仏陀の原因(普通)を包囲するかのよう、心ある風景のありのままの姿を抑え込もうとした、権力の座に居る存在たちの、非道な思惑。そのことで、各地で悲劇が引き起こされ、人々は、永いこと(現在に至り)、歪な正しさの中で、生きることの真を忘れる。宗教の名の元での、心ある原因の無い、支配と統治、そして争乱。宗教心(心)を持たない宗教は、征服欲を正当化してしまう程、人としての真を持たない。

仏陀の普通との融合体験は、人としての生きる基本形を

力強くする。そして、宗教という言葉も、その概念も不要とする真の普通の中で、宗教という名の様々な形ある世界が、その人としての基本形の原因と重なるか(融合するか)どうかも、観察し得ることになる。キリスト教という、真実への抵抗。イエスという存在が居るとすれば、彼ほど、人間の欲に翻弄され、嘘に利用された人間は居ない。仏陀の心を知れば、それは、普通の認識となる。

5. 人間経験を選んだ、仏陀の意思のその影響力は、それへの抵抗と拒否を各地で生じさせ、思いがけず、心無い存在たちの嘘に力を与えてしまうことになるが、それだけ歪で愚かな人間社会が続けられていたそれまでを考えれば、そのことが顕になったということでは、彼の誕生は、大きな意味を持つ。充分な仕事を為し得なかったとしても、彼が生きた身体時間のその手前の状況(背景)は、決して放っては置けない非人間振りの様。そのこと(人間経験)がどんな性質の変化をもたらし、それによって、どんな未来が引き寄せられようとするか…。仏陀の生命(多次元的な感性)は、自らの意思表現を通して見えてくる、その時代の人たちの形無き本質を観察し、次なる生の機会のために、それを大切な材料とする。近隣の国々での、仏教(真の普通)の歪曲と形骸化。遠国での、心を切り離れた嘘の教え(宗教)の確立。彼が身体を終えた後に、躍起になって嘘の正しさを広め、それを巧く常識とさせてしまう力ある存在たちのその全ての原因を、仏陀は、自らの原因

の中に溶かす。それを、釈迦牟尼の生での、最も重要な仕事とする。

6. 西欧で盛んになったキリスト教は、後にこの国にも伝わることになるが、そこでは、それまでに力を付けた、仏陀への拒否反応から生まれた浄土思想が、それとの融合を上手く演出するかのようになり、その受け皿となる。浄土(極楽)と天国、念仏と祈り、そして根強い他力と審判。思考型の観念的思想作品として生み出されたそれらは、どれも、責任ある原因を持たない、心の無さの具体化。

人の心を癒し、共に心ある風景の原因を力強くする普通がその宗教の中に在れば、それは、困った人の存在を無くす流れをつくる。決して、困った人の存在を前提としたものであってはならない。その教えに、人としての成長の基本要素である、中庸の精神が普通に在れば、行為としての反省を必要としない、自らの原因への責任感覚があたり前となる。決して、それは、反省することに心地良さを覚える、優越や差別の感情を潜めるものであってはならない。

それらの普通を寄せ付けない、キリスト教。その普通ではない事実から自然と学べば、争いや病気、貧富の差などの原因を浄化する知恵は、容易に手にすることになる。そして、自らの健康と平和の原因がそのことで高まれば、そこに(キリスト教に)生命本来の原因が存在しないことも知る。人は、自然と、生きることの性質と未来へのその責任に真剣になる。